

## 「会長就任に当たって」

### 会長 神林 勲 (北海道教育大学札幌校)



平成30年度から3年間、会長を務めさせて頂くことになりました。平成18年度から事務局(幹事)を担当し、その後、編集委員長や理事長を務めました。この12年間の経験を活かして、また、役員・事務局の先生方のご協力を頂き、学

会をより良き方向へ進められるよう尽力したいと思います。会員の皆様のご協力もお願い致します。

さて、先の学会大会(北海道医療大学)の総会でもお知らせしましたが、本学会は2021年に創立70周年、2020年に学会大会が第60回を迎えます。これを記念し、まずは一時停止されていた研究助成を復活させ、その成果を第60回の学会大会で発表して頂く予定です。

また、第60回大会も記念大会にふさわしいものになるように、開催場所を含め大会委員会が鋭意検討中です。会員の皆様も、この機会に学会大会の予稿集・プログラムの裏表紙にある「学会大会の歩み」をぜひご覧になって頂き、北海道体育学会の歴史を感じて頂ければと思います。

会長の就任に加え、平成31年度からは地域選出の代議員も2年間務めることになっております。日本体育学会と地域協力学会(旧支部)との関係はこの間、様変わりしました。しかしながら、全国学会の運営体制や会員の皆様に関わる事務的な摺合せが十分ではない部分が多々あります。これらの課題にも北海道体育学会の意見や考えを、積極的に日本体育学会へ発信して行きたいと思っております。

## 「理事長を拝命するにあたり」

### 理事長 石澤 伸弘 (北海道教育大学札幌校)



平成最後の理事長を拝命致しました。

とにかく自然災害が多い年号でした。小職も昨年9月の地震では、2日間強の「ブラックアウト」を経験しました。これが真冬の出来事だったらと思うと、恐怖に身が竦む思いです。

会員の皆さまも、事の大小に関わらず、諸々の被害や損害を被ったことと思います。この場をお借りして、遅まきながらお見舞いを申し上げます。本当に大変な時代でしたね。

そのようなわが国において、開催が間近に迫る、「ラグビーワールドカップ2019」や「東京オリパラ2020」、そして「関西ワールドマスターズゲームス2021」などのトピックが、唯一、明るい話題を発信していると言っても過言ではないような気がしています。

体育・スポーツの持つ「力」で、何とか、われわれ国民を元気づけて欲しいと心から願うばかりです。

最後になりますが、神林会長をサポートし、学会のより良い発展に寄与する所存ですので、ご協力の程、よろしくお願い致します。

## 口頭発表傍聴記

### 渡部 峻（北翔大学北方圏生涯スポーツ研究センター）

本年度の口頭発表は大会両日に実施され、演題数は18題でした。今回の発表は若手研究者発表、スポーツ指導、授業づくり、運動生理等、多岐にわたる分野の研究がありました。皆様の発表概要について報告します。

若手研究者の発表では、吉野氏（北翔大学 大学院）は、高齢者を対象としたフリークライミングの指導方法について。早坂氏（北翔大学大学院）は、鉄棒運動における



後方支持回転の指導について。佐藤氏（酪農学園大学 大学院）は、月経周期が最大脂質酸化量および最

大脂質酸化量時における運動強度に与える影響。吉田氏（北翔大学大学院）は、小学校低学年児童の自主的な「ジャンプ遊び」の運動回数が運動能力に及ぼす影響。若手研究者発表では指導に関する研究、生理学的研究、運動能力に関する研究がなされましたが、どれも今後の発展を期待される内容でした。なお、酪農学園大学大学院の佐藤氏は若手研究者賞を受賞されました。

浅井氏（札幌市立陵北中学校）は、震災直後の中学生における学校体育に関する事例報告。上家氏（札幌市立中の島中学校）は、小学校高学年におけるシンクロ鉄棒の指導実践―鉄棒への好感度および運動有能感の向上に着目して―。清野氏（北海道釧路養護学校）は、知的障害



特別支援学校の体育授業における「相撲遊び」の試み。高橋氏（札幌市立東栄中学校）は、

言語的コミュニケーションと短距離走の技能獲得との関係―中学校体育授業の分析から―。渡邊氏（芽室町立芽室西小学校）は、新体力テストを教材とした低学年体育の

事例研究。塚本氏（東海大学）は、体力づくりの取組に関する児童の振り返りと教師の声かけの検討―テキストマイニングによる自由記述を用いて―。中島氏（北海道教育大学札幌校）は、中学校における体育科と他教科との関わり―言語的コミュニケーションに着目して―。木本氏（藤女子大学）は、子どもにおける平日と休日の睡眠状況の変化が自律神経系活動に与える影響。秋月氏（北海道医療大学 大学院）は、北海道マラソンに出場した男性ランナーのパフォーマンスと障害の関係。井上氏（北海道医療大学）は、30 kmペース走は北海道マラソン出場男性ランナーの記録向上に有効か？神林氏（北海道教育大学札幌校）は、酸化ストレスと性差および加齢―健常者における尿中 8-OhdG レベルの評価から―。樋口氏（釧路工業高等専門学校）は、卓球ボールの材質およ



び構造が反発と寿命におよぼす影響。岩本氏（小田原短期大学通信教育サポートセンター）は、女子大学生における健康行動変容を意図した授業が健康意識と身体組成に及ぼす影響。千葉氏（北翔大学）は、北海道A市中学校教員にみる学校部活動への取り組み方と態度。

口頭発表では、それぞれが非常に意義のある研究ばかりで、研究手法や観点は異なるものとても興味をそそられる発表ばかりでした。質疑応答についても、様々な質問や意見が交わされ、時間が足りず、やむなく次の発表へ移るといった場面も多々ありました。全体の内容としては学校教育に関するものが数多い印象でした。学校現場での課題や問題点を研究として取り扱い、研究で得られた知見を学校現場に還元されることを求めています。

以上、ご発表頂きました全ての皆様に厚く感謝申し上げて、私の口頭発表傍聴記録とさせていただきます。

### 高橋 正年（札幌市立東栄中学校）

第1日目の最後のプログラムとして、日本女子体育大学の湯田淳先生を講師としてお迎えし、教育講演が行われた。湯田淳先生は、第23回オリンピック冬季競技会（2018年平昌オリンピック）のスピードスケートの日本ナショナルチームの監督としてご活躍され、現在も日本ナショナルチームを率いている。そこで今回は、「平昌オリンピック・スピードスケート競技の活躍と科学サポート」と題して、教育講演を開催した。以下にご講演の内容を紹介する。

#### 1 ソチオリンピック後の強化体制の改革

前回大会のソチオリンピックでのスピードスケートの日本のメダル獲得目標数は、前々回大会（バンクーバーオリンピック）の銀2つ、銅1つを上回る、金銀銅を合わせて5つとされていたが、1つも獲得できない過去最低の数となった。獲得数第1位がオランダで、金銀銅を合わせて23個で、2位にポーランドに20個の差をつけるだけではなく、35個のメダルの6割以上を獲得する強豪国であった。

当時の日本のスピードスケートの強化体制は、企業チームが主体で、ナショナルチームを指導するのも企業チームの指導者が務めており、ナショナルチームが常に設置されている状況ではなかった。そこで、ソチオリンピックの日本の惨敗を受け、ナショナルチームを常態化し、8年後のオリンピック（平昌オリンピックの次の北京オリンピック）での復活を目指し、湯田氏をナショナルチームの監督とし、改革を実施することとした。その改革の目玉が、オランダからのコーチの招聘と科学サポートである。

#### 2 オランダからのコーチの招聘

これまで企業チームの指導者が日本のスピードスケートの基盤を構築してきたことには間違いはなかったが、状況の打破には、オランダからのコーチの招聘が不可欠であると判断した。オランダからのコーチの招聘は、企業チームの指導者の排除となるため、大きな反発を生むこととなった。これまでの88年間の日本スピードスケートのナショナルチームに、外国の指導者を受け入れた実績がなく、いわゆる閉鎖的な体制であり、足りない部分を補う環境が整っていなかった。競技力は、技術・体力・戦術に大きく分類できるが、オランダのコーチの分析によると、日本の選手が、オランダの選手と比較して圧倒的に劣っていたのは「体力」であった。この体力の強化

のために、オランダ式を取り入れることとなった。オランダのコーチの指導の特徴は、科学的な根拠に基づくトレーニングが基本である。代表的なものに、自転車によるトレーニングがある。オランダでは、夏季のトレーニングの中心が自転車である。短距離の選手であっても、長距離の選手であっても、自転車によるスピードトレーニングと持久的なトレーニングを行っている。日本も自転車による

トレーニングを見直し、プログラム化を図った。また、体力に加え、

技術や戦術の向上や、選手や指導者の実態把握のために「科学サポート」の強化を進めることになった。

#### 3 科学サポート

科学サポートを充実させるため、研究サポートのスタッフをこれまでの1名から10名に増加した。また、ナショナルチームの練習場所を国内2か所（帯広と長野）に限定し、LPMシステム（28台のカメラ）でレースや練習を撮影し、滑走軌道や滑走速度を記録した。これは、選手の実態把握を目的とし、レースやピッチ、平均スピードや瞬間スピードの解析により、選手一人一人の課題の把握や原因の究明を目的とした。また、関節の角度や氷上の接地状態などの分析も進めた。なお、日本の選手に限らず、国際大会等の出場選手の全ての国内外のレースの動画は、選手や監督が、タブレット端末で24時間、瞬時に視聴できる映像サポートシステムを確立した。また、レーシングスーツの開発、栄養サポート、自転車のトレーニングの負荷の管理やコントロール、日本人コーチの育成なども同時進行で進めた。また、体力測定は、東京のナショナルトレーニングセンターで行うのではなく、強化拠点である帯広と長野でも実施できるようにした。このような科学的なサポート、ナショナルチームの改革により、メダル獲得数は、オランダに次ぐ第2位となり、金銀銅で6個を獲得する復活を見せた。ジュニアチームの育成も継続しており、北京オリンピックでの更なる活躍が期待される場所である。



## ポスター発表傍聴記

吉川 博人（札幌市立札幌みなみの杜高等支援学校）

2018年の学会大会では、大会1日目の午後に8題のポスター発表がされました。今学会大会でも、これまでの学会大会のポスター発表と同様に、実践的研究、実験的研究、事例研究と多岐に渡った研究が発表されました。また、幼稚園・保育園、中学校、特別支援学校、大学等と、幅広い校種や年代を対象とした発表もあり、興味深く傍聴して



ておりました。以下に、簡単ではありますが、発表され

ました内容をご紹介します。

1) 「中強度のレジスタンス運動が気分と認知機能に及ぼす影響」東浦拓郎先生(亜細亜大学)：大学生を対象とした中強度のレジスタンス運動において、有酸素性の全身運動のようなポジティブな気分変化が生じることや実行機能が向上する可能性についてご報告されました。

2) 「中学生の運動習慣と学業成績の関係:2年間の縦断的研究」石原暢先生(玉川大学脳科学研究所)：中学1年生を対象とした2年間の縦断的調査において、過体重の子どもほど運動習慣と学業成績の間のポジティブな関係が強いことをご報告されました。

3) 「高等特別支援学校における短距離走の指導実践」梅田千尋先生(北海道小平高等養護学校)：知的障害がある生徒に記憶認知の定着を図り、クラウチングスタートから加速走行と等速走行の動作を習得できたことで全員のタイムが伸びたことをご報告されました。

4) 「体育授業のゲームにおけるオフィシャルルールの適用に関する検討：バレーボールのレシーブにおける脚部使用に着目して」近藤雄一郎先生(北海道大学大学院教育学研究院)：大学生を対象とした体育授業で脚部を使用したレシーブの現状と学習者の意識を明らかにし、ゲームで適用するルールの吟味の必要性をご報告されました。

5) 「運動と遊びに関する一考察」佐藤亮平先生(尚絅大学短期大学)：「幼稚園教育要領」、「保育所・保育指針」、「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」を対象とし

た幼児教育における運動と遊びがもつ意味内容についてご報告されました。

6) 「7人制ラグビーのペナルティキックにおけるプレー選択に関する研究」鯉淵凌先生(函館工業高等専門学校)：HSBC Sevens World Series2015-16年シーズンにおけるPK場面で選択された4種類の攻撃戦術と達成度についてご報告されました。

7) 「内観的反復練習を活用した「倒立前転」の習得に関する事例的研究」緒方涼実先生(北海道教育大学釧路校)：ご自身の運動習得ができなかった経験を基に、運動習得における自分ごとの欠如を解決するための「倒立前転」の習得について、プロセスと練習課題を中心にご報告されました。

8) 「低酸素環境下での間欠的激運動中の活動筋酸素化動態について」高橋生季先生(北海道教育大学大学院)：13名の男子大学生を対象とした高度3500m相当の低酸素環境下での間欠的激運動中において、活動筋はより過酷な低酸素状態になることやセット数の進行によって遷延することをご報告されました。

各先生方の発表終了後にディスカッションの時間が設けられました。フロアでは発表者と参加者が限られた時間の中で、活発な議論と意見交換をしていました。冒頭にも記載した通り、今学会大会のポスター発表では幅広い校種や年代を対象とした研究がありました。私的なこととなりますが、様々な研究の現状や研究成果を知り、これからの自身の課題を見つけていく上でとても勉強になる充実した機会となりました。

ポスター発表のよさは、発表者と参加者が直接



的な対話や議論を通し、研究視点や研究内容をさらに深められることにも意義があると思いますので、次回学会大会でも、多くの先生方との対話や議論を通した研究発展の場となることを願っております。

## 若手研究者賞を受賞して

### 「これまでのご指導に深く感謝して」

佐藤未来（酪農学園大学大学院・帯广大谷短期大学）

この度はこのような名誉ある賞をいただき、大変嬉しく思っております。選考委員の先生方に心より御礼申し上げます。また、本研究を進めるにあたり、山口太一先生をはじめ、ご指導いただいた多くの先生方や先輩方、協力してくださった後輩たちに深く感謝申し上げます。

今回の発表テーマである「月経周期が最大脂質酸化量および最大脂質酸化量時における運動強度に与える影響」は、女性の心身に変化を与える月経周期に着目し、月経周期の各フェーズ（卵胞期および黄体期）で脂質を最も利用できる量（最大脂質酸化量）とその時の運動強度に相違が生じるかを検証したものです。

この研究を始めたきっかけは「巷間では月経周期内で痩せやすい時期と痩せにくい時期があると言われていたが、本当にそんな時期があるのか？」と疑問に思ったことからです。また、脂質が最も利用される運動強度が明らかとなれば、効率の良い減量やトレーニングができる

ようになるのではと思います、研究を進めてまいりました。

本研究の結果より、月経周期の違いは最大脂質酸化量とその時の運動強度に相違を生じさせないことが示唆されました。したがって、月経周期内で痩せやすい時期、痩せにくい時期はないと考えられます。

体育・スポーツの分野において、女性競技者を対象とした研究は少しずつ増えてきてはいますが、まだまだ少ないのが現状です。本研究で得られた知見が少しでも女性競技者、ひいては女性競技者に関わる方々のお役にたてれば幸いに存じます。今後も先生方からいただいたご指導・ご助言を検討課題とし、さらなる発展を目指して研究を深めてまいる所存でございます。

今回の受賞を糧とし、今後も体育・スポーツの発展に寄与できるよう全力で努めてまいります。未熟者ではございますが、どうか引き続きご指導ご鞭撻のほどよろしくお願ひ申し上げます。

## 北海道体育学会第58回大会を終えて

大会事務局 山口明彦（北海道医療大学）

この度は、北海道体育学会第58回大会を大きなトラブルもなく無事に終了できましたことを、役員、学会事務局をはじめとする関係各位に感謝申し上げます。

準備期間が1年という期間があったこと、事務局からいつまでに何をすべきかの連絡があったこと、さらに私たちの問い合わせに対して役員、事務局が素早く対応していただいたことで、安心して準備に取り組むことができました。また、大会初日の朝、こちらが準備にあたふたしている時に様々な方が率先してご協力していただき、本当に感謝しています。この場をお借りしてお礼申し上げます。

今大会を運営するにあたり、一番の心配事は懇親会でした。北海道医療大学は札幌近郊の当別町にあります。札幌との移動には1時間以上考えないとはいけません。参加者は札幌の自宅からや、遠方から来た人も宿泊場所は札幌と考えられ、参加者の負担をできるだけ少なくするにはどこで、どのように開催するかで悩みました。結果として当別町にある温泉施設を利用したお座敷での開催となりましたが、多くの方が参加し、皆様の温かいお気

持ちによって楽しい雰囲気では終了できました。帰りのバスの中での参加者の笑顔を見て、少しホッとした次第です。

教育講演では、日本女子体育大学の湯田先生にお願いして、スピードスケート競技について現在どんな改革を行い、科学がどう取り入れられているかをご講演いただきました。最近の体育・スポーツに関する不祥事が多発する中で、オリンピックでのメダル量産、かつ科学的に取り組まれているスピードスケート競技の現状をお知らせできたことは、参加者に明るい展望を届けられたのではと感じています。

今大会を運営して、参加する側の視点だけでなく、運営する側の視点から学会大会を考える機会が得られたことは非常に良い経験となりました。また、北海道体育学会の会員として、帰属意識が高まったように感じます。有り難うございました。最後に、大会に参加していただいたすべての方々に心よりお礼申し上げます。今後ともよろしくお願ひ致します。

## 研究委員会活動報告

研究委員長 越川 茂樹 (北海道教育大学釧路校)

本年度の学会大会は、口頭発表 18 題、ポスター発表 8 題の計 26 題をいただきました。例年に比べると演題数は少ないですが、さまざまな視点から学校や地域の現場を見つめ研究課題を設定し取り組んでいる傾向がみられました。今後さらに研究が進み、体育・スポーツ研究の発展に寄与することを期待します。また、北海道体育学会は地方学会ではありますが、道外の会員もおり、今回はその方々にも発表していただきました。北海道という一地方の枠を超えて、研究活動がより活発になることも意義深いことであると思います。



(酪農学園大学・帯広大谷短期大学) の「月経周期が最

若手研究者賞には、今回 4 題のエントリーがありました。厳正な審査の結果、佐藤未来氏

大脂質酸化量および最大脂質酸化量時における運動強度に与える影響」が選定されました。受賞理由の一つは、研究のデザインがしっかりとしており、研究全体が良くまとまっていたことです。もう一つは、非常にわかりやすくまとめられたスライドにより発表していただいたことです。若手研究者として今後の活躍がより一層期待されます。今回受賞を逃した方々におかれましても、これからも地道に研究を継続して欲しいと思います。残念ながら、本年度の若手研究者賞のエントリーは、ここ最近で最も少ない数でした。来年度は是非多くの方々が、若手研究者賞に挑戦することを願っています。

最後に、北海道体育学会は、2020 年には 60 回目の学会大会を行うこととなり、2021 年では学会創立 70 周年を迎えます。こうした節目を記念して、2019 年度、北海道における体育・スポーツ研究の活性化と道民のスポーツライフの充実に寄与することをめざして、研究助成をすることになりました。どのような研究が採択され、取り組まれていくか楽しみです。

## 編集委員会活動報告

編集委員長 編集委員長 永谷 稔(北翔大学)

今年度より編集委員長を初めて仰せつかり、無事第 53 巻が発刊できましたこと、ひとまずホッとしているところであります。本巻は、原著論文 1 編、研究ノート 1 編、実践研究 3 編、計 5 編の掲載となり、原著論文は昨年度学会大会の若手研究者賞を受賞した論文です。投稿数自体は 10 編ありましたが、残念ながら 2 編が不掲載、3 編が継続審査となりました。

今年度より編集委員会では、投稿者とのやり取りを紙面による郵送で行っていたものを、全てデータによるやり取りとし、少しでも多くの時間を確保すべく変更させて頂きました。私の力不足もありますが、多くの方の投稿して頂いたにも関わらず、掲載まで持って行けなかったことは非常に残念でなりません。学会誌である以上、論文としての水準や内容が担保されなければならないことはもちろんですが、多くの議論や発表の場として本学会誌が活用されることを望むところでもあります。次巻も 3 編の継続審査を含め、より多くの掲載となるよう、ご準

備頂ければと思います。

また、投稿料の超過分追加料金について議論がなされました。例年トータルの頁数から超過料を割り出していたところ、発刊する頁数によって超過料が変動してしまうため、今年度より 1 頁超過当たり一律金額徴収に改めました。投稿規程の改定については追って行うこととなります。そして、Abstract については、Native Check が必要ではないか、投稿後に編集委員会において一括して Check を依頼すべきではないかなど、検討がなされています。結論的には、投稿者が投稿するに当たって事前に Check を受けておくべきとの見解にとどまっておりますが、皆様方にもご協力頂き、学会誌として、論文として一定水準や内容を担保して頂くことを、重ねてお願い申し上げます。

最後に、本学会誌の充実、発展のために微力ながらも尽力致しますので、来年度も引き続きよろしくごお願い申し上げます。

秋月茜 (北海道医療大学大学院)

まもなく平成が終わり、新しい元号になりますね。先生方にとって平成はどんな時代だったのでしょうか。私は特に平成の中盤から、たくさんの方と出会い、学び、多くの経験をさせていただきました。その中でも「韓国」との出会いが大きく、この世界に入るきっかけの一つでした。

平成22年、あるきっかけで某K-POPグループにハマり、そのグループの韓国語の歌の意味を瞬時に理解したいと強く願い、独学で韓国語を学び始めました。毎日歌を和訳し、何度もドラマを見たりしているうちに、日常生活は困らない程度の語学は身に付いていました。

そして気がつく、翌年には韓国へ留学をしていました。当時、韓国の友達たちが、休学をしても日本などに留学し学ぼうとする姿を見て、私もより一層の努力が必要だと痛感しました。その後も韓国への熱が冷めないまま大学院進学後、平成26年に再び韓国へ行かせていただき、韓国語を使いながら、自分の興味・関心の高いことについて調査をさせて頂いたことで、もっと知りたい・やってみたいという欲が増したのを覚えています。今は

まだ足踏みが多いですが、たくさんの方に助けて頂き更なる楽しみを夢見て、少しずつ前に進んでいる(?)状態です。

最近、崔虎星という“남시꾼 스윙 (fisherman swing)”で注目を集めている韓国のゴルファーがいます。彼は職場がゴルフ場だったのを機に26歳の時にゴルフクラブを握り始め、34歳で遅いプロ入りをし、誰にも教わらず独学で努力してきたそうです。私自身、遠回りしていますが、何かを始めることは何時でも遅くないことを、彼から改めて学びました。

同時に私の場合、多くの方々に助けられて今に至っているという有り難い環境にも感謝しなければならないと思いました。「韓国」に触れて、何かへの興味・関心は人を学ばせること、人との出会いがあること...多くを学んできました。平成は終わっていきませんが、次の時代も感謝の気持ちを忘れず、努力を惜しまずに精進して参りたいと思います。かなりまとまりのない文章になってしまいましたが、最後まで読んで頂き有り難うございました。今後とも、ご指導・ご鞭撻のほど宜しくお願い致します。

## (おもしろさの追求)

畝中 智志 (北翔大学)

日々雪が舞い、降り積もっていきます。ここ江別市では当たり前の光景が私には新鮮です。マイナスを示す気温の中を歩くのも、車に積もった雪をおろすのも、衝撃を受けつつ新たな経験として楽しめています。大阪府に生まれ育ち、鹿児島県で学生生活を送り、東京都での職を経て、今年度4月に北海道へやってきました。

専門は？と問われた際には「バスケットボール」「スポーツ心理学」と答えています。学生に(あるいは生徒に)そのおもしろさを伝えようとするほど、自身の学びがまだまだであることを痛感しています。20数年前にバスケットボールと出会い、色々な土地で様々な関わり方を持つことができました。現在は部の顧問として、また授業で学生に指導する立場として奮闘しています。スポーツ心理学では、主として運動学習や熟達化研究に従事する傍ら、スポーツメンタルトレーニング指導士としての活動を行うことを志しており、赴任して一年が過

ぎようという中で、少しずつですが今後の展開が見えてきたように感じています。

しかしながら、想像できる今後の展開は往々にして覆されます。順調なことが行き詰まったり、ピンチだと感じていたことが良い機会となったり...「想定外の結果が出てきた時こそ、おもしろいと思え」と、研究指導を受けていた中で伝えられた言葉です。自身の成長に結びつけるためにも、どの場面でも通用する大事な考え方だと思っています。現段階では、言わんとすることはわかりますが、心の底から実感できていません。前提となる知識や経験が不足しているのか、より適した方法があったのか、結果の解釈が足りないのか...実感できたときこそ、真のおもしろさがわかると思っています。

教育・指導・研究、様々な場で想定外のことを楽しむ(対応できる)ように精進していきます。

## 広報委員会活動報告

広報委員長 小出 高義（北海道教育大学旭川校）

広報委員を務めさせていただき、2期目に突入いたしました。広報委員会の中心業務であるニュースレターの発行は、本号をもって4回目となります。

これまで広報委員会の仕事をご一緒頂いた木本先生は、事務局としてホームページ運用を担当されることとなりました。これに伴い広報委員会はホームページ活用による広報活動を行うよりも、会員数が増加に結び付く独自の広報活動が求められることとなりました。

そんな中、新しい広報委員には、帯広大谷短期大学の高瀬淳也先生と、身体開発研究機構の瀧澤一騎先生に加わっていただきました。高瀬先生は、道東での現場経験があるため小・中学校の先生方に顔が利くし、瀧澤先生は学会における発言でもお分かりのように、豊かなアイデアを持っていらっしゃいます。大変頼りになるお二人の力にすがりつつ、今後の北海道体育学会のより発展のために、会員の獲得を検討していきたいと考えています。

ここ数年、若手賞の設置により、大学院生や学部生の

学会参加が増えてきたように思います。若い研究者の姿を見ているだけでも頼もしく、また嬉しくもあります。ただ学生の時だけ参加する場になっているようにも思われます。

そこを、それぞれの仕事についてからも継続して参加したくなるような魅力的な学会にするにはどうしたらいい

のか。会員の皆様のお知恵も拝借して、その効果的な発信から、興味・関心のある方々に入会いただけるように、広く報じてまいりたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。



## 事務局より

中島 寿宏（北海道教育大学札幌校）

いつも北海道体育学会会員の皆様には、大変お世話になっております。2018年度より本学会幹事として事務局業務を担当しております中島寿宏（北海道教育大学札幌校）と申します。今年度から本学会事務局は木本理可先生（藤女子大学）、塚本未来先生（東海大学）、そして私

の3名で運営しております。

2019年度の本学会の事業と致しましては、まず、5月下旬に臨時

総会と話題提供発表が行われます。臨時総会では、前年度の事業報告と決算報告および新年度の事業計画と予算案の審議が中心に行われます。今後の北海道における本学会の意義などを念頭に、会員の皆様には事業計画や活動方針などについて積極的にご意見を頂きたく存じます。

また、臨時総会後には、会員相互の情報交換・意見交流と研究内容の深化を目的として、話題提供発表を開催いたします。2015年に始まったこの企画も今年で5回目となります。話題提供発表では、過去のデータの再分析結果、他学会などの発表と同一内容のものや構想段階のものも発表可能な機会となっており、例年多くの発表があります。北海道内の研究・教育に関わる皆様の研究交流の場としていただきたいと考えておりますので、臨時総会だけでなく話題提供発表にも奮ってご参加、ご発表頂きたいと思っております。

次に、2019年12月14・15日には北海道教育大学釧路校にて第59回学会大会を開催予定にしております。昨年の北海道医療大学での学会大会は大変盛況に行われました。例年10月上旬が発表申込みと抄録原稿の締め切りとなっておりますので、お早目にご準備のうえ、是非多くの会員の方々にご参加頂きたいと考えております。学会大会などに関する詳しい情報は、学会HP(<http://www.hspehss.jp/>)に掲載いたしますので、随時ご確認頂けると幸いです。



## 写真で振り返る北海道体育学会第58回大会



1日目の受付

2日目の受付



提供されたドリンクの説明を聞く



待ちに待った若手賞の発表



そして笑顔の受賞



スピーチ



聞き入る会員

★★

ご多忙の中、原稿をお寄せいただいた先生方どうも有り難うございました。感謝申し上げます。

北海道体育学会ニュースレターNo. 10

平成31年2月7日発行

広報委員会委員長 小出高義

★★

是非ご覧下さい 北海道体育学会公式ホームページ <http://hspehss.jp/>